

る。この書物の文献目録には出ていないけれども、ジャカルタの Balai Pustaka から "Atlas Dialek Pulau Lombok, 1954." 「ロンボク島方言地図」なども出している（もっとも、これは1951年の同氏による英蘭語版からの翻訳である）。

マライ語研究者の座右にこの書を備えることによって研究がよりスムーズに進むことになる。附録として p. 158~171 にマライ語の実用手引書、教科書のリストが添えられてあるがこれも便利である。

（崎山 理）

Winstedt, R. O. : The Malay Magician, being Shaman, Saiva and Sufi. Revised and enlarged with a Malay Appendix. Routledge and Kegan Paul, London. 1961. pp. 180

宇野円空博士は、マレー人の宗教を、「インド教の果実を民族宗教の肉汁で煮て、マホメット教の容器に盛った」ようなものと概括されている。（マライシアに於ける稲米儀礼）。古くから大陸と島嶼地域を結ぶ懸橋であったマラヤは、様々な人種や文化の交流の場であったから、マラヤの文化が極めて異質的な諸要素から構成されているとしても不思議ではない。本書において、Winstedt は複雑なマレー呪術の体系を構成する異質的な諸要素の解明を試みている。

しかし、マラヤの民族宗教は、民族学において、早くから研究されていた為、Winstedt の民族宗教に関する叙述では、別に新鮮味は見出されない。唯、Winstedt の現地についての該博な知識は、従来不明確であった部分を補っている。Winstedt によれば、マレー人の間には二通りの呪師が存在する。一つは世襲の呪師（pawang）であり、他は、神経症的巫者（bĕlian）である。専門の呪医は bomor とも呼ばれる。Negritos や原始マレー族では、呪師に対する敬意を表現する意味において、樹上葬などが行なわれたが、農耕地域では埋葬形式が一般的である。巫者の性は、ヒンズー教や回教の影響を受けて、一般に男性であるが、母系制地域では女性である。崇拜の対象となる生霊は、Sĕmangat と呼ばれる生命力であり、それは靈魂ではない。死者霊に似た觀念はあっても、祖先崇拜はなく、それは、むしろ人格的生霊である。

このような民族宗教の「肉汁」は、四世紀頃よりヒ

ンズー教の「果実」を受入れる。後者がもたらしたものは、地方の生霊を組織だてる宇宙神の体系、呪術の地位を確立する諸技術（断食、冥想など）、呪文祭詞（mantra）、占星学、神王の觀念、護符などであるが、これらは、呪師や王の神格化には貴重であっても、農民の民族信仰の内容を根本的に変革するものではなかった。

以上の混淆物は、更に十四世紀頃より回教という「容器」に吸収され、アラーの神の統制下に置かれる。しかし、アラーの神は、マレー農民の日常生活から余りにもかけ離れた存在である。嘆願の祭詞、供儀の内容や意味は回教化され、ト占や護符、呪薬も回教の影響を受け、回教徒の悪霊も導入されたが、これらの変化にもかかわらず、農民は、食物の生霊保護のために民族宗教の内容を未だに保持している。農耕儀礼や人の一生の折目折目の儀礼は、回教のヴェールを覆った民族宗教を内容としている。外来信仰を受入れたのは、むしろ、王朝都市や港町の住民であった。

以上の事柄について、Winstedt は具体的に、そしてやや随想的に叙述する。従って、本書は、神々の名や由来に親しみのない者には、理解し難い所も少なくないが、マラヤの社会構造の思想的背景を歴史的に理解する上に、多くの示唆を与えている。

（口羽益生）

Cheeseman, H. R. (Compiled by) : Bibliography of Malaya. Longmans, Green and Co., 1959. xi + 234

この文献目録は副題に示されたようにマラヤとシンガポールに関する、一部又は全部が英語で書かれた文献の分類目録である。1955年 British Association of Malaya の当時の総裁 E. D. Shearn 氏の要求で Cheeseman 氏が採録に当たったもので、図書館としては、Malaya House, Royal Commonwealth Society, London Library, Penang 及び Singapore Library, University of Malaya Library, Washington Library of Congress などに当り、更に官庁や学会としてはフェデレイションの農業、文部、森林及び博物館の助力、SBRAS (Straits Branch of the Royal Asiatic Society), MBRAS (Malayan Branch of the Royal Asiatic Society) 及び Malayan Historical Society の助けを得てい

る。又人としては Richard Winstedt, Victor Purcell, R. E. Holtum, P. E. Wood, 等高名のマラヤ研究家の助けを受けているし、又当然のことながら多くの助手諸氏の努力の産物である。

分類の内容は Agriculture, Forestry and Horticulture; Animals; Archaeology & Prehistory, Bibliographies & Lists; Bibliography & Memoirs; Education; Fiction; Health & Medicine; History; Law; Linguistics; Mining & Geology; Miscellaneous (General, Cookery, Journals, Newspapers etc.); Peoples of Malaya; Plants; Poetry; Religion; Second World War in Malaya; Trade & Economics; Travels; Addenda であり、終りに索引を附している。

この分類の方法の可否については大いに問題があるであろう。例えば一寸考えても地理や社会に関するものをどこへ入れるのか。自然科学的な専門分野については更に問題があるのかと思われる。この点ではやや素人向の分類だとも思われる。一人の著者の書物を改行しないで追込んだ組み方についても図書目録としては長所とだけは言えないようである。

雑誌論文もかなり入っているが、然し試みに若干の書籍や論文を選んで引いて見ると英書は略々発見するが、雑誌論文には記入のないものもあって、全幅的な採録がなされなかったのかと思われる。

しかし何より文献目録としての最大の問題は英語の文献だけが採録せられたことではないかと思われる。この点は副題に明記されているのであるから致し方ないことかも知れないが、淋しい感じをまぬがれない。例えば Martin の Inlandstämme とか Nippold の Rassen und Kulturgeschichte der Negritivölker のような著名なものでも独乙語なるが故に我々はこの文献目録には発見し得ないのである。編集の大方針が変らなければこの点は補われないであろうが、やはり一言せずにはおられない。

マラヤの西欧との接近は周知のごとく1511年のポルトガルのマラッカ攻略にはじまり、1641年のオランダの交代、1786年のケダー王からの英国へのベナン割譲、それからの英国の長い間の経営と続き、漸く1957年8月に独立国となるのである。この間特に英国の統治経営には注目すべきものがあるが、東南アジアに於て最も繁栄しているのであるが、その裏面に於てこの文献目

録に現われているような多数の学者の研究がなされて来たことは注目すべきことである。いろいろの問題はあるとは言え、マライ研究の一つのよりどころとなることは確かであるから、漸次充実したものになって行くことを期待したい。
(棚瀬襄爾)

Fraser Jr., Thomas M.: Rusembilan, A Malay Fishing Village in Southern Thailand. Cornell University Press. 1960. pp. xviii + 281

タイ国の南端、マレー半島中部に位置する Pattani, Yala, Narathiwat 及び Satuan の4県では、人口の80%までがマレー人である。しかも中国人、タイ人は、市や町に居住するのが殆んどなので、この地域の村落人口はほぼ100%マレー人といわれる。Rusembilan というのは、このようなタイ領マレー人の東岸漁村の一つで、ここで、著者夫妻が1956年に行った現地調査の報告が本書である。

まず地域環境、住民、歴史的背景といった序論に続いて、このコミュニティを synchronic に3つの面にわけて考察する。漁業（主にアジ）、農業、交易と商業などの Economic society の面。中央・地方のタイの政治における、あるいは宗教組織の中における Rusembilan を表わす Sanctioning society の面。第3の面の Kin-ceremonial society は、地域社会の構造、イスラム信徒としての村人、しかも精霊信仰の根強い信者、等から述べられている。ここまでは、著者の意図としては、地域社会の平面図を書いたものと見てよい。

これに続いて、人の一生を時間的にたどる生活史（推移儀礼をつなぎあわせたものではあるが）を述べた後で、残る2章でもって、今までの資料を社会=文化体系の理論の中で説明しようと試みる――

始めは米作農民の移住村であったものが、地理的・経済的な要因から、漁を専門的にするようになった。この米作農民から営利的な漁村（大型漁船、モーターボートなどの導入）への移行は、文化的適応と社会的調節を余儀なくすることは勿論であるが、適応と調節が均衡をとって進行しないと、社会構造に更に2次的な変動が生じる。この社会構造の2次的な調節、適応と共に、地域社会の文化の志向とを考察しなければ、全体としての過程はわからない。Rusembilan では